

毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第 8 卷 第 6 号

1963年6月25日



冬姿の2羽のオス

(3月中旬 爺ガ岳)

撮影 高橋秀男

大町山岳博物館

爺ガ岳雷鳥調査行 (3)

高橋秀男

3月12日

出発の朝、心配された天気もしばらくは持ちそうである。午前9時、調査隊5名、支援隊7名、計12名がジープに分乗。大町の市街地をあとに、一路雪深い扇沢に向かって突走る。扇沢で装備を完全に整え、ラッセルを開始したのは10時、予定より随分遅れてしまった。混成パーティーでは無理がないと思う。

扇沢を100mほどつめて南尾根にとりつく。最初から急坂のラッセルに悩まされ、これからの行く先が案じられた。荷物の重さもみな30キロは軽く越えているだろう稜線からはラッセルに加えて、さらにブッシュがからまり、苦斗の連続である。次第に疲労の色が濃くなる頃、雲行きも怪しくなり、4時1950m近くにキャンプを張ることに決めた。

3月13日

6時出発。昨夜から降り始めた雪は止んだが、荷物は雪で濡れ、ぐっと重みが増したようだ。尾根は相変わらず深いラッセルの連続である。もし間違っただけで雪中に眠るコメツガでも起そうものなら、腰まですっぽりと入り、体が宙ぶらりんに浮き上がってしまう。そしてワカンが木の枝にひっかかり、足が抜けず、脱出するのにひと騒動である。

それでも2320m白沢側に延びる尾根とのジャンクションまで来ると、幾分楽にはなったが、今度は体のほうがバテ気味でいうことを聞いてくれない。頂上は見えていながら、手前に幾つかの小さな起伏があり、じつに遠く感ぜられる。

南峰直下をトラバースして、調査基地種池小屋に到着したのは2時。小屋の周囲は4mの積雪があらうか。扇沢側は屋根まで埋もれ二階の窓を堀り出して出入口とする。すべての荷物はヘリコ(私たちはヘリコプターの愛称をこう呼んだ)によって運搬されることになっている。明日の天候に期待をかけて、寒い部屋、貧しい食糧でまんじりともしない一夜を過した。

3月14日

ヘリコの来る日、早朝4時半に起床して、ヘリポートづくりに汗を流した。ヘリポートは小屋の西方50mの平坦部で、10m四方に雪を踏み固める。支援隊は8時に下山する。

無風快晴、ヘリコの飛行には絶好の天候。しかしどうしたか予定の時刻になっても飛ぶ気配がない。本部からの連絡ではエンジンの故障により遅れているとのこと。11時第一回目のヘリコが爺ガ岳南尾根上空に見えた毎日写真部の牧野氏の誘導により、物凄い雪煙と爆音をたて、着陸した。雪の後立山連峯には最初の着陸である5回の飛行により、約1トンの装備、食糧、燃料、調査器材が運搬された。

3月15日

昨日から引き続き、小屋内の整理。装備、食糧、調査器材の荷解きに午前中費した。この小屋で40日間過すとなると、どうしても居住性をよくしなければならない。

午後2時写真撮影をしながら、断片調査に向かった。調査地域は全て雪の世界である。尾根歩きにはアイゼンもきいたが、少しでも尾根をはずれると雪深く歩きにくい。

周囲は北に双耳峯の鹿島槍、西に黒部川を隔て、鏡・立山連峯、南にごつい岩小屋沢岳、その隣にはどっしり落ちついた針ノ木、蓮華岳などが展望でき、写真撮影には申分ない景観である。出発まもなく雪中に憩う純白のライチョウにお目にかかった。オスは口はしから目の



深雪を上手にラッセルする



雪煙にけむるツルギ岳

周辺まで黒い羽毛が生えており、威容と貫録を誇っているのに比べ、メスは可愛らしい。彼らを遠くから観察していると、柔らかい雪上に片羽つつぱたぱたやりながら徐々に穴を掘り、体ごと雪穴に入って目と口はただ覗かせている。雪よりむしろ白い彼らが雪穴に入ると、外敵に発見されることはまづ無いだろうし、人間が雪洞で生活するように暖かく、風もよけられるだろう。

3月17日

前日は一日中雪降りで行動できず、今日もまた午前中は吹雪である。午後3時、風強く視界5m、でもときどき霧の間から鹿島や剣が顔を出すので、天候の回復に望みをかけて調査に出発する。じかじ、新雪が深い上、視界も開けず、行動が思うようにできないので、5時に引き返し始めた。帰途、オスとメスが巧みにラッセルしながら歩行、採食しているのを観察する。新雪はライチョウにとっても苦手のようなのである。歩行は遅々としているが、足全体を上手に使い、尾を雪面に下げて前進している。雪に埋もれた餌をにわとりのように足で掘り出し、コケモモの葉、ガンコウランの葉などを盛んに採食していた。人間に例えるなら、足はワカン、爪はアイゼン、尾はストックの役目をなしているのであろう。

3月18日

朝から冷たい偏西風が一日中吹きっぱなしであった。観察中、メモもることさえ手が冷たくて嫌でたまらない。棒小屋沢から吹き上げる雪煙で四囲の山々は霞んで見える。ハイマツやオオシラビソの葉がちぎれ飛散することさえあり、観察者は樹木も同然である。

風速30m、新積雪3m、零下16度の寒さ、人間どもには到底生活できない環境、厳しい自然の猛威と斗う彼らにはたまに感服させられる。文字どおり、氷河時代を

生き返ってきたライチョウにふざわしい。

風で羽が逆立ち、ときには位置が変えられなくなるような強風下でも、彼らは風に立ち向かって飛翔する。

今日は全部で14羽、オス4羽の群、オス1羽、オス4羽の群、オス1羽、メス4羽の群がそれぞれ群をつくっていた。

3月19日

本格的な足環のとりつけ作業が始まった。カシミ網を張り、集団で休息や採食している

群をとりまき、徐々にカシミ網の近くまで追いつめ、進退極まっているところを、別の捕虫網のような特製の網をす早くかける。捕えると早速体温と体重を測定しビニール製の足環をとりつけた後、放鳥である。

足環のとりつけは、彼らの仲間関係や生活している場所を知る上に欠くことができない。かれんな鳥をいじめることは忍びないが、サルのように特徴がないので、顔を覚えることは困難である。足環の色でピンク・ミドリク・ピンク・アカク・キ・キミドリクなどと色の組合せによって名づけられた。

3月21日

彼らも捕えられることは嫌であろう、なかなか足環のとりつけははかどらず、彼らにうまく裏をかかれて、しばし亡然としていたこともある。天候のよいときは、尾根の下方についているので人間どもの方がぐたくたに疲れてしまう。200m下方にいる彼らに接近し、そっと網をかけようとする、突然飛翔して2600mの稜線にまで出る。下降に20分もかかった所を彼らは1分足らずで飛び、こんどは降りた地点まで1時間は充分かゝるのであろう。人間どもがライチョウに引きずりまわされている情景である。

3月22日

私は昨日から涙が出て困ったが、どうやら雪盲症らしい。平林隊員も同様な症状を訴える。考えて見ると入山以来、サングラスをかけたことはない。足環の色を素早く見分けるのに不便であったり、また彼らを追跡するのに、足元がわからず、危険を伴うので、嫌われたのである。とくに私の方がひどいようである。遠景が二重に見える、字を書いても同様、明かるい所に出ると涙は出るし、仕末が悪い。これ以上悪化すると調査に支障をきたすの



朝と夕方によく飛しょうが見られる

で、一日中暗いところに寝たままで、冷湿布をほどこす

3月24日

猛吹雪。むろん行動はできない9時の気象観測さえ難事業で、観測値を読むとトランシーバーで連絡、室内で野帳に記入する。また水源である雪のブロックも貯えて置かなければならない。窓の隙間から雪が吹き込む。停滞の一日は退屈である。唯一つの娯楽用具であるラジオに聞き飽きると、こんどは読書、図書室の本もみな読み尽くし、古新聞に読み耽けている。少し刺激があるといえは、トランプのポーカーに熱中するくらい、平凡な一日である。夕食の準備はできるだけ時間をかけ趣向をこらし、ギョウザ、五目飯、寿しなど、あの手この手で自慢の腕をふるうが、4時半早くも夕食ができ上がってしまう。1時間半くらい、でき上がった飯を前にお預けである

3月28日

今日は自衛隊の調査員のメンバー交代と一部食糧の補給のための支援隊の来る日である。4時40分目覚時計に起されて本部と交信開始。6時、支援隊は南尾根にとりついている。

支援隊が加わると総勢10人、小屋内の整理をしてから9時、支援隊の援助に向かう。2320mのジャンクションで支援隊と合流。支援隊と合流すると、街のことや山の上の話題に花が咲き、時ならぬ賑やかな夜となった。今まで同じ面につき合わせて20日間、変化の乏しい生活苦しいアルバイトにぼつぼつ人が恋しくなり、畳の上が恋しくなってきただけに名残りはつきなかった。

3月31日

調査は二班に分かれ4時半に出発したA班は8時半B班と交代して、小屋に帰り朝食をとる。A班は2時まで休養をとり、午後2時半B班と交代し、午後7時まで観

察する。これが毎日の日課である。

彼らの生活は4時50分から始まった。突然暗やみの静けさを破ってガガー、ガガーとちよとツチガエルのようななき声があちこちから聞かれ、やねを立った模様である。稜線近くのエサ場に出た彼らは、しばらくは餌も食べずに警戒をしているが、やがて集団で採食を始める。エサ場は樺小屋沢側の斜面で、風で吹きさらされあらわになっているヒ

ース状草原である。採食を終るのは8時頃、だんだん稜線の下方に降り、シラビソ林内、ハイマツの林縁、雪穴、岩陰などで長い休息に入る。日中は天敵を避けるために行動はにぶい。夕方4時彼らは再び稜線に出て、集団で採食し、日没後7時あたりが薄暗くなって飛しょうしてねやつく。こんな単調な生活を毎日繰り返している

4月1日

今まで集団生活をしていたオスの間で激しいつき合いが見られるようになる。早朝の採食中、3羽が飛翔して雪原に出た。3羽は互に張り合い威圧するような姿勢で5~6m離れて激しく鳴き合う。接近すると3羽がからまり、つき合いが始まる。強いものは弱いものを追って飛び立つ。野帳にはアルミ白♂→ピンクミドリ♂、ピンク赤♂→ピンクミドリ♂と記入される。

4月4日

彼らが昨夜一晩過したねや跡を観察にいった。40度もある急斜面の軟雪上で、しかも広い雪原である。地上性でしかも夜行性の天敵キツネ、テンなどを避けるにはよい場所だと思われる。7羽の集団でねやをとるために雪中にとびこみ、ねやからは歩いて出たらしい。羽ばたきの羽跡、足跡、雪穴、糞が5~6mの範囲に生々しく散在している。雪穴の中には羽毛と糞が54~58個、近くには盲腸糞が10ヶ所もある。

4月6日

午後2時40分雪浴びをしている。ちょうど夏の砂浴びのように雪中でバタバタと羽ばたき、雪をとばし、体を雪にこするようになる。するいオスがいて、メスが夢中になって雪浴びをしている所に近づき、雪穴を横どりして、すまして雪浴びをしているものいる。

4月10日

♂アルミ白がピンク赤♀と採食中にディスプレイをする。♂は真赤に肉冠を開き、尾羽を扇状に立て、片羽をさげて♀に接近する。ちょうどにわとりに似ている。時期が早いいためか♀は無関心で、かえって逃げてしまう

4月11日

朝夕のつきき合いで順位ができたようだ。南峰から種池小屋までの間にすむ4羽のオスは、キ・キミドリ、アルミ白、アルミ左赤右黒、ピンク赤の序列である。

4月15日

だいぶ融雪も進み、ハイマツが頭を持ち上げ、お花畑もずいぶん現われた。雪が腐り、雪山に遅い春がやってきた。彼らも自分の縄ばりを決めてくる。キ・キミドリが上方にその下方にアルミ白、アルミ左赤右黒は種池小屋のすぐ近くで、ちょうど順位の順序である。縄ばりの範囲は300mくらいである。彼らはオオシラビソの樹上に止って、よそから侵入してくるオス、例えばアルミ白ならキ・キミドリ、アルミ左赤右黒のオス、を見張りしている。もし他のオスが侵入して来ようものなら、目ざとく発見して追い出してしまふ。たゞピンク赤はすみかを失ったように、アルミ左赤右黒、アルミ白の縄ばりの境界線を徨い、両者からはいつも追われている。ピンク赤は何処へ行くのだろうか？

オスがつき合っている間、集団で生活をしていた♀も個々に生活場所を定めてきたようだ。アルミ白の縄ばりにはアルミ白の♀が見られる。縄ばり争いの終ったあとのアルミ白の♂はアルミ白の♀と採食、休息などの行動をともにしている。

4月16日

キ・キミドリ♂はキ・キミドリ・キと、アルミ白♂は

アルミ白♀と、アルミ左赤右黒はアルミ赤々とカップルで生活している。これらはそのまま夫婦になっていくのだろうか。調査期間である4月20日までには、どうも安定したカップルにもなりそうもない。またピンク赤オスの行動も確実につかむことができない。調査期間4月30日まで延長を真剣に考へ本部へ打診する。

しかし、本部からは期間延長まかりならぬという冷たい返事しか得られなかった。

4月18日

温かい日は調査は楽のようであるがどうしてこんどは歩行が困難である。雪の下には自雷が埋められているよである。知らないで踏もうものなら、下が雪洞になうていて、胸までもぐってしまふし、湿雪のため靴の中は水びたしである。調査地域のハイマツや草付が露出してきたため、日中はハイマツの林緑で休息するようになり調査は雪融けの線に添って歩かなければならない。わかんをつけてひと回りしてくると目まいがする程疲れる。

4月19日

今日登ってくる筈の支援隊は悪天候のため一日延期された。朝から雨降り。40日間顔も洗わず、ましてや風呂にも入らないので、手首はすくなくており、何もかもむさ苦しく感ぜられる。すっかり伸び切った髪と赤銅色に日陽けた顔には、歯と目だけ白くてキョロキョロしている。これが自分とは思えないほど醜い顔である。いよいよ下山する日も間近に迫ったので、みんな湯をわかし磨きかける。

4月20日

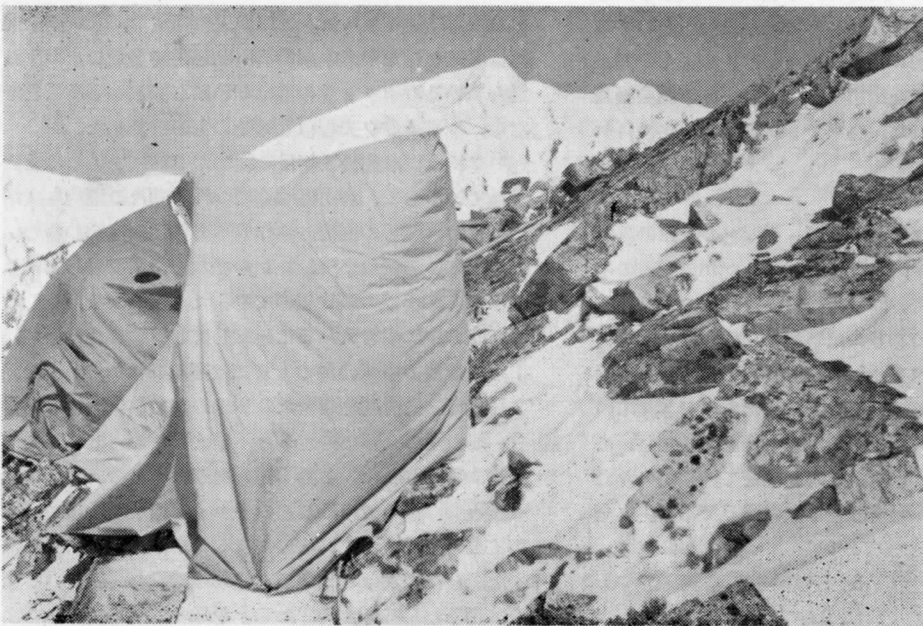
朝から小屋内の整理に多忙を極める。40日間野わえたゴミはダンボールに20箱、みな焼却する。午後2時11名

の支援隊が到着。小屋は見違える程きれいになった。

4月21日

40日間住みなれた山小屋ともお別れの日である。苦しいことの多かった調査生活であったが、いざ帰るとなると感慨無量である。

下山の荷物は意外に重くこたえたが支援隊のみなさんは、よく奮闘してくれた。



寒い日の調査員はツェルトザックに入って休息する

(おわり)

コブハクチョウ増殖失敗の記

海川庄一

大町市の北部に湖面を連ねる仁科三湖、その最南に位置する木崎湖の北岸、ここは、北隣の中綱湖から流れて来る中部農具川が木崇湖へ流れ込む川尻であり、ここにかつて地元の漁業組合がコイやマスを飼養した養魚池がある。現在、この池の一つに一つがいのコブハクチョウが飼われている。この鳥は、皇居外苑保存協会のご厚意によって、昨年大町市に贈られたものであり、その飼育管理には当山岳博物館が当たっている。受入以前から仁科三湖をオオハクチョウ並びにコブハクチョウの楽園にしようという大きな構想があった。そんなわけで、市の当事者や地元海ノロ地区は勿論、コブハクチョウ受入れにご協力された有志の方々や一般市民から本年度におけるコブハクチョウ増殖について多大の期待が寄せられていた。にもかかわらず、今ここに、コブハクチョウ増殖失敗の記を書かなければならぬことは大変残念であるが、今後のために実状をご報告し、大方の皆様のご教示とご支援を得たいと思う。

コブハクチョウの受入れ

受入れの時期は渡り鳥としてのハクチョウの習性も考慮して東京の桜も満開となり、一方大町の雪も消えて、日増しに暖くなる3月の下旬が選ばれた。木崎湖漁業協同組合より借り受けた養魚池には外柵が施され、中央部に休息、巣作り用の4.2m余りの小島も築かれた。又直接飼養担当者として地元海ノロ地区の郷津勝市さんが選任された。昭和37年3月27日、早朝大町に到着した雌雄各1羽のハクチョウは、皇居外苑保存協会からわざわざお出いたいた高樹事務局長さんをはじめ多くの関係者の見守る中で、時の松田市長ならびに平林市議会議長の手によって放鳥された。ハクチョウは当時孵化後11ヶ月であった。

飼育の一般的状況

放鳥の直後は投げ与えたキンギョモなどの水草のみを食べ、餌箱には寄らず、ちょっと心配したが、数日の中に池と飼育者になって、餌も充分採るようになった。給餌は早朝と夕方2回であり、はじめ外苑保存協会からいたいた、以前に食べていた配合飼料と当館の配合飼料とを混ぜ、これに青菜、水草等を加えたものを与えていたが、一週間後には、当館の特別配合飼料だけにし、これに同量以上の青菜、水草、雑草を混ぜて、やわらかにねって与えた。飼料の配合割合は次の通りである。(全量15kgの内容)

・トウモロコシ	5.5 kg	36.5%
・ゲンコムギ	5.0 kg	33.3%
・フスマ	0.5 kg	3.0%

・ユスカ	0.5 kg	3.0%
・魚粉	3.0 kg	20.2%
・カキガラ	0.5 kg	3.0%
計	15.0 kg	100%

これに同量の野菜を混ぜ、別に水草を与う。

給餌量は、ハクチョウがわずかに食べ残す程度を見て1日1羽当り約、700gとした。

心配された梅雨時も事無く過ぎて、大町にも真夏がやって来た。東京で夏を過ごした経験のあるハクチョウ故夏の暑さについてはあまり心配していなかったが、飼育池のまわりは風通しは良くても午後の西日をささぐるものがないので、池の西南隅に16㎡余りの日除けを差しかけてやった。

八月の中旬を過ぎると大町はすっかり涼しくなる。ハクチョウが元気で夏を過ごし、秋の換羽も終ると、こんどは厳冬の保護をどうするかが問題であった。元来寒さに対しては強い鳥であると言われていたが、休憩島の上に雪が積ったら足がつめたかろうし、餌箱の中に雪が積れば餌が採れなくなる。そこで島の上と、餌箱の上に風雪除けを作るべく工事の設計と予算措置を急いだ。中々思うように仕事は進まなかった。結局、初年度は仮施設で間にあわずより仕方がなくなり、年の暮に島の上と餌箱の上に雪除けを仮設した。

巣作り

昭和38年を迎え、ハクチョウの池も数十センチメートルの積雪に見舞われた。例年以上の寒波で、木崎湖の北部は凍結を見たが、中部農具川から常時多量の水が流れ込んでいるハクチョウの池は幸いにして氷が張ることもなく、ハクチョウ夫婦は元気そのものであった。

ハクチョウは生後3年目に親になり蕃殖を始めると云われているので、春が近づくにつれて我々の期待も次第に高まり、彼等の発情、巣作りへの注意がはられた。1月下旬から柳の小枝、ヨシの茎など、巣材として使えそうなものを池の端に置いてやった。彼らがそれをくわえて池の中に引き入れることはしばしば観察されたが、1月中は池の中央の島の上までは運んで行かなかった。2月上旬、発情期を迎えたのか雄の警戒心は次第に高まり、池の端に人影が見えると、雄は羽を逆立て、寄って来るようになった。2月も中旬を過ぎると今まで池の上に雄と共に浮いていることの多かった雌鳥が、雄から離れて島の上に立っている姿がよく見かけられるようになった。また彼女はその頃から、島の東側を囲っている雪除け用「むしろ」から「わら」を取って島の上に敷くようになった。3月上旬に入って本格的な巣作りが始まっ

た。岸边に束にしておいた柳の小枝はハクチョウの雌雄によって島の上に運び去られ、雪よけ用むしろも、ちょうど不必要になる頃には、彼女らによって半分もむしり取られ全く用をなさなくなった。

雌は3月中旬から一日の大半を島の上で過ごすようになり、巣の完成を急いだ。一方、雄は巣作りはお手伝い程度で良く外敵の警戒こそ自分の任務であると心得ているかの如く、池の周辺部を羽を逆立て、遊び回り、外柵に近寄る人があれば一時も眼を離すことはなかった。こうして、4月上旬、直径1m余に及ぶハクチョウの巣皿が出来上った。

産卵と抱卵

4月18日、雌は巣に坐ったまま離れなくなった。採食の時間に巣を空けるだけである。未だ卵は見られなかった。生物季節から見た春の訪れが大町は東京よりも10~20日おそいことと皇居におけるコブハクチョウの産卵期から推測して、大町における産卵は4月20日前後という予想を立てたところ、4月21日の朝、飼育者から1卵を確認したとの報告があり、その後の調べで3卵まで確認することが出来た。4月21日から雌は抱卵に専心するようになった。5月29日抱卵日数30日目を迎えたので午前11時から翌30日の午前12時まで25時間の連続観察を行った。この観察の結果は次の機会に報告したい。

孵化発生とその結末

5月31日の朝夕とも雌は抱卵状態で巣上にいた。ところが、6月1日の朝、飼育者は巣島の西数mの池の上に卵1ヶが浮いているのを発見して収容した。電話で連絡された私は早速急行し、39°Cの湯タンポであたためてあったその卵を受け取り、体熱で給温しながら自宅に運び、一先ず孵卵機へ入れてから、検卵してみた。ところが明らかな無精卵であった。この時、私はハクチョウの池に立寄り、残る2卵の状態を確かめて来ようとしたが、雌が抱卵姿勢にあったということしか確かめられなかった。

翌6月2日には当館主催の探鳥会があり、コースの最後がハクチョウの池になっていた。小鳥バスの一行と共に今朝こそはヒナが見られるだろうという期待を持って9時過ぎ頃ハクチョウの池に行ってみると、おどろいたことに雌雄共に巣から離れている。巣の中には卵もヒナも見えない。雌雄共、昨日までの真鍮さはどこへやら、抱卵などはすっかりあきらめたと云う様子である。実はこの時はすでに飼育者の郷津さんによって2羽のヒナの無残な死体が発見収容されていたのであった。探鳥会終了後、飼育者の案内でヒナの死体のあったという巣付近並びにヒナの死体の状態をくわしく検査し、付近の状況からネズミによる被害と断定した。ネズミがヒナを喰うなどは全く予想しなかった事態であり、今更ながら残念でならない。以下事故現場の状況とヒナの死体の状況を付記する。

(1) 現場の状況

1羽のヒナの死体発見場所は、巣島の東側傾斜面(ヒナが水から島に登れるようゆるい傾斜をつけてある。)の水中で、水際より60cm。他の1羽のヒナの発見場所は巣皿の南東端、巣材の下の地表面。ここよりネズミの地下道(半地下式U字型断面のトンネルで巣材を取ると全体が明るみに出るように作られていた。)がはじまっており、入口より(即ちヒナの位置より)30cm程奥へ入ったところに卵黄の付着が見られた。この位置までヒナの内臓を引き込んで食べたものと見られる。更に巣材を取除けて調べたところ、白鳥の巣の下にネズミのトンネルが縦横に走っているのが見られ、巣皿の中央部の真下あたりから突然赤褐色味を帯びたやゝ大型のネズミが一匹とび出した。このネズミは池の水中を走って岸に出、コンクリート岸を登って外柵の外へ逃げた。カワネズミではなからうかと思うが、このネズミの種名は未だはつきりしない。

(2) ヒナの状況

1羽(水中にあったもの)は羽毛のついた皮の一部と内臓のごく一部を、他の一羽は翼全体と片方のミズカキの部分全体を残すのみで他は喰われてなくなっていた。第1のヒナ(水中にあったもの)はやゝ古い死体で、1mm程のウジが少し発生していた。第2のヒナの死体は全く新しく卵黄も10g程内臓と共に残っていた。

(3) 孵化した日

死体の状況及び卵確認最終日(5月30日)の状況より推定し、孵化日は1羽は5月31日、1羽は6月1日又は6月2日早朝と見られる。被害は卵黄の残存量などよりみて、何れも孵化直後又は孵化後24時間以内と推定される。

(4) 抱卵日数

抱卵日数は4月20日より5月31日までとみて41日間。あるいは6月1日までとみて42日間となる。

今後の対策

6月14日 今後のハクチョウ保護対策を立てるため、海ノロ公民館に関係者参集、ハクチョウ飼育研究会を開き次のような対策を立てた。

①池のコンクリート壁に高さ90cmのネズミ返しをつける。

②島の上は全面にコンクリートを打ち中央に排水孔をつけるだけとし、コンクリートの上に荒砂を薄く敷いてやる。

③巣の材料はワラを少くするよう、ワラの給与量を制限する。

④ネズミの生活を調べ極力退治する。

以上今までの経過の概要を記したが、大方の御指導をお願いしたい。

博物館だより

小鳥の声を聞く会行なわる

6月2日 午前4時、大町駅前を発車した。バスの横には大きな「小鳥バス」の幕が張られ、車内には小鳥の音が流れていた。このバスは松本電気鉄道KKの好意により無償運転されたものである。居谷里湿原ではカッコウ、クロツグミなど30余種の声を聞き姿を観察し、コブ

オオルリ

長沢修介

オオルリは俗にルリとも言われ飼鳥などでも昔から有名な鳥である。

背面がコバルト色で喉と胸が黒色、腹が白色でその姿を山野で見かけた時は息をのむ程の美しさである。そのうえ鳴き声が美声かつ複雑で古来ウグイス、コマドリと共に日本の三名鳥の一つに数えられていて絵画などにもその描かれた姿を良く見かける。

溪谷にそった山林が主の棲み家で大体4月の下旬頃に日本に渡って来る。至る所にその美声を張り上げているが美しいコバルト色の姿を実際に見た人は少ない様である

一つの梢に止って鳴くことが多く虫などが飛んで来るとひらひらと飛んでパチ、パチと嘴を鳴らして空中でそれを捕えて又元の梢に戻って朗々と嘯る。姿といい嘯りと

暖風

日本登山学校の開校に際して

すでに諸外国のフランス、ドイツ、オーストリア、スイス、ソ連に国立スキー登山学校又は登山学校があり、インドにも政府後援のヒマラヤ登山学校があります。一方世界的に登山者層の厚いわが国が、毎年次々と有為の青年を失い、社会的損失と家庭の悲劇をくり返しながらか、そしてその度毎にその必要性を叫ばれながら、何故それを必要とする学校をつくらないのでしょうか。

私はここに結論として諸外国同様の国立の学校を設立し、一日も早く山のルールたる安全登山学の確立による遭難事故の防止、指導者の養成、実技、ならびにマナー習得を含め、その人間形成を教育の基盤として指導に当るべきであると多年の力説を再びここに繰り返すものです。

しかしながら現況では未だその域に達せず、ここにその時機を促進しつつ、諸外国と比肩しうる日本登山学校を、わが国の権威、精鋭をすぐって開校しようとするものです。

しかしながら、学校経営のみならば、その運営は困難かつ消極的に偏するため、わが国財界ならびに岳界各方面の善意と協力によるその本拠となり、また世界最初の構想たる一大スポーツセンターの山岳会館を建設し、その多角経営により、両々相俟って事業目的を達しようとするものであり、この実現はわが国青少年をいかに勇気づけるであろうか計り知れないものがあると思います。

人的構成 学校が行なう指導内容等詳細は下記にお申し込み下さい趣意書を進呈いたします。

東京都大田区調布嶺町1の140 川崎隆章

寒流

ハクチョウ園を見学したあと午前10時大町駅前解散。

北信越5県博物館協議会

6月6日 北信越博物館協議会は松本市で開かれ、一行12名は当博物館を視察のち松本に向った。

コブ白鳥保護対策会議

6月14日 大町市平区海ノロ分館でコブ白鳥の保護対策会議が地元、観光課、建設課、本館その他の人々を交えて開かれた。

いい全くの才色兼備型の鳥である。又この鳥は自分の美しい歌の中に他の鳥の鳴き声を入れて一つの歌にしている場合もある。写真のオオルリはシラカバの梢で嘯っているものであるがこの鳥はウグイスのキョキョキョキョという俗に谷渡りと言われていた鳴き声の一つの歌の前に入れては次に自分の歌を朗々と歌っていた。



お願い 7月号は都合により休刊します。

山と博物館 第8巻 第6号 1963年6月25日発行
発行所 長野県大町市 TEL(大町) 211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町 信州印刷大町工場